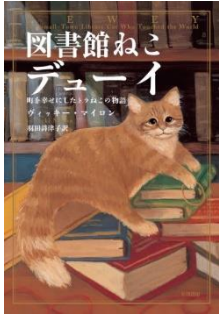




2021年5月館員おすすめの本

『図書館ねこデューイ』（ヴィッキー・マイロン）

吉田 梨紗



あるとてつもなく寒い朝、小さな子猫はアイオワ州スペンサー公共図書館の返却ボックスの中に捨てられていました。子猫は「デューイ」と名付けられ図書館スタッフの一員になります。デューイは来館者を出迎えたり、膝の上に乗ったり、探検したり、スタッフとかくれんぼをしたりすることも。噂を聞きつけたたくさんの人々が図書館を訪れ利用するようになり、デューイは農業危機にあえぐスペンサーの人々に癒しと笑顔をもたらしました。

館長のヴィッキー（著者）と18年間同僚として、ときには家族として人生の幸せな時も辛い時も共に過ごしてきた一匹の猫。言葉は通じないけれど彼らは相思相愛で強い絆で結ばれていました。人間と猫の絆と愛が感じられる奇跡のような実話です。（早川書房）

『魯肉飯のさえずり』（温又柔）

原 真由美

台湾出身の母親を持つ日本生まれの桃嘉は、たどたどしい日本語を話すママを子どもの頃かっこ悪いと思っていました。母親自身も異国での子育てに奮闘しながら、ふつうでない自分を責め続けます。桃嘉は誰もが羨む社マンと結婚しますが最近では心のすれ違いに悩みます。それを象徴する場面が夕飯の魯肉飯をめぐるやりとり。香辛料の香りを前に「ふつうの料理のほうが俺は好きなんだよね」と言い放ちます。登場人物たちのふつうという言葉に苦悩する姿が描かれます。やがて深く傷ついた桃嘉は台湾を訪ね、母親のルーツを知ることで再出発を決意、その姿は常に悴からはみ出さずに生きている私たちにとってすがすがしく感じられます。



（中央公論新社）

『秘密の花園』（バーネット）

大久保美玲



ペストの流行により両親と死別した10歳の少女メアリは、叔父のクレイヴン氏に引き取られ、イギリスヨークシャーのムーア（荒野）の果てにあるミッスルスウェイト屋敷に住みはじめます。「こんなかわいげのない子どもは見ることがない」と十人中十人に言われるほどつむじまがりな貧相な子どもだったメアリ。しかし召使いのマーサやその弟ディコンと交流し、深い自然の中で草花を育てる喜びを知ることにより、まるで魔法がかかったように健康的になり、味気なかった生活も光り輝く楽しい日々に変化します。子どもはもちろんのこと、人間にとって何が大切なのか、この作品を読むとよくわかります。自然に囲まれた広い土地は持っていませんが、一鉢の花を慈しみ育てることから始めて、魔法のお裾分けに預かりたいと感じました。（光文社古典新訳文庫）